



(イヤホン耳に懐かしい歌)

ばできない仕事だ。
第二に、看護師さんや理学療法士さんのリハビリの助っ人である。お昼、PEGからの経腸栄養剤の注入や、散歩の車椅子押し、あるいは、リハビリの両膝屈伸のお手伝いなど、いくらでも仕事はある。
もちろん、これだけでも時間があまる。あまった時間は読書だ。済生会病院では、主に、老人問題の本をどんどん読んで、文字どうり読書の秋を満喫した。

毎日、夕方になると、
「もう晩になるから、今日は、これで帰るね。明日は、また早く来るからね」。

と、病院をあとにする。
はるか、67年ほど前の恋愛時代にも、毎日ではないにしても同じような別れがあった。よく似ている。

が、デイトの別れには、「明日への希望」があった。しかし、いまの別れには、「夕陽の哀愁」が伴っている。だから、いつでも、後ろ髪引かれる思いで、足取り重く灯りのないわが家をめざしたものである。

5、転ばぬ先の杖離れ

わたしの歳になると、どうしても足下が不如意で転倒しやすくなる。しやがむ動作が大変で、庭の草取りなども難しくなった。一寸した凹凸にもつまずいてしまう。在宅介護5年の末に90歳で天寿を全うした母が、寝ついたのも畳の縁（へり）につまずいて大腿骨を骨折してからだった。当時、母は、まだ85歳だった。

わたしも、転倒・骨折でもしたら介護はできなくなる。

それこそ、転ばぬ先の杖である。「岩波」の『ことわざ辞典』には、「あらかじめ準備をととのえ、失敗しないようにすることのたとえ」とある。わたしもいつの頃からか杖について歩くようになっていた。

2014年7月1日。

安倍内閣は、歴代自民党政権も、「憲法9条をもつ日本は、集団的自衛